

真言宗に改められていたことが、初めて見える。

元禄十一年（一六九八）

沙空が後を継ぐ。

宝永七年（一七一〇）

本堂建立

文化十三年（一八一六）

護摩殿の再建。

文政十一年（一八二八）

暴風により尼寺が倒壊する。

天保四年（一八三三）

庫裏再建。

明治十九年（一八八六）

宮本孝梁師が三重塔の建立を発願。官許を得る。
（翌年着工）

明治二十八年（一八九五）

三重塔竣工式を行う。

明治二十九年（一八九六）

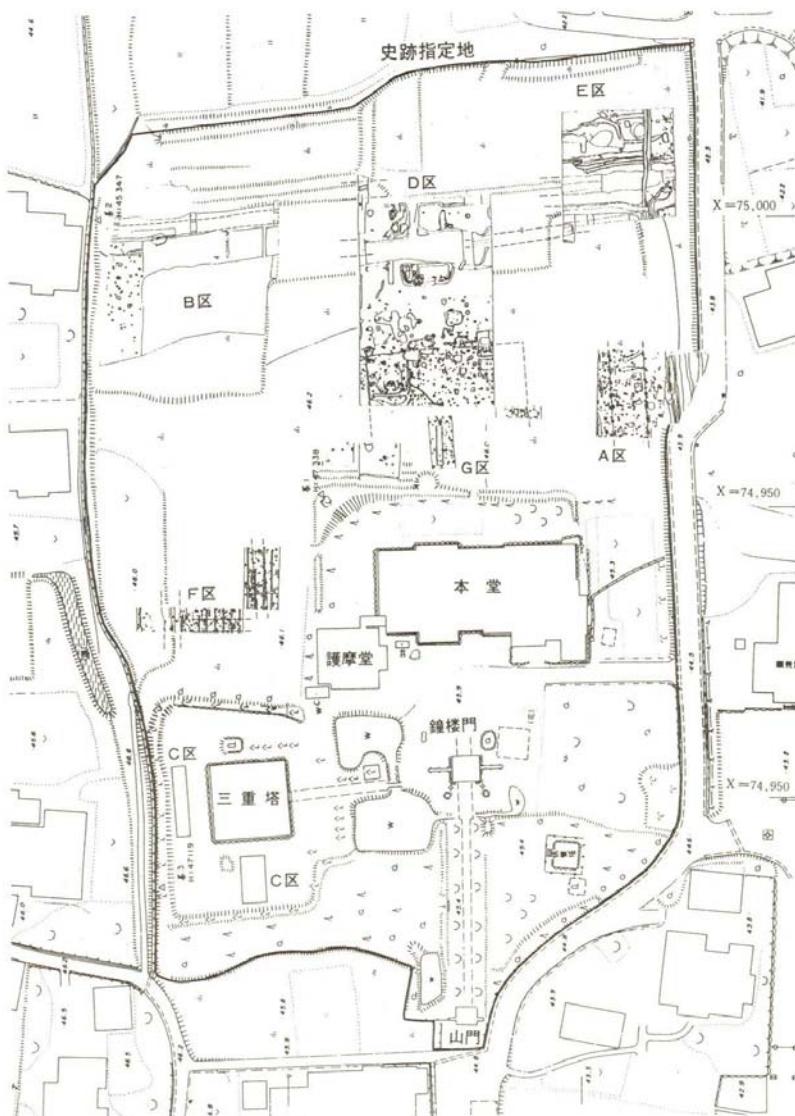
三重塔落慶法要を行う。

三 豊前国分寺の発掘調査

(一) 豊前国分僧寺跡の発掘調査

奈良時代創建当時の豊前国分僧寺跡は、現在の国分寺を中心に、より広い範囲を寺域としていたことが予想されている。このため、昭和四十九年（一九七四）に寺域の範囲と遺構の分布状況を確認するための発掘調査が行われた。その結果昭和五十一年七月十五日、現在の本堂の北部を含めて、一万四三四九平方メートルの面積が国の史跡として指定されたこととなつた。指定地の住所は大字国分寺屋敷である（第36図参照）。

第3章 律令政治の展開と郷土—奈良・平安時代



第36図 豊前国分僧寺発掘調査区配置図

発掘調査の契機

発掘調査は昭和四十九年の第一次調査ののち、昭和六十年度(第二次)から六十二年度(第四次)にかけて、指定地の史跡公園化事業を進めることを前提とした、基礎資料収集のための事前調査が行われた。この事業は、整備対象地を本堂の北部および西部としていたことから、発掘調査もこの一帯を中心実施することとなつた。

なお、指定地外の西部および南部は大部分が宅地となつていて、指定地内とほぼ同じ標高四六メートルであるので、関連遺構が残存している可能性は高い。しかし、北部や東部は一メートル二段差があり低くなっているので、遺構が残つてゐる可能性は低い。

**調査方法と
遺跡の概要**

指定地北部は第二次調査以前においては、竹や低木が繁茂する原野となつていて、調査は、まず山門と鐘楼門の中心を結んだ線を中軸線とし、その後適宜指定地内に測量用のクイ打ちを行つた。なお、調査の中軸線は国土調査法第II座標系に対して、零度二七分一九秒東に傾いている。

各年度の調査場所は次のとおりである。

第一次調査 指定地北半の南部を中心、幅一メートル三メートルの東西・南北各方向のトレンチを設定。

第二次調査 指定地北半の南東部がA区、同北西部がB区、三重塔の西側と南側のトレンチがC区である。

第三次調査 指定地北半の中央部の調査区およびその南西側と南東側のトレンチがD区、同北東部がE区である。

第四次調査 指定地北半の南西部がF区、D区南側に設定したトレンチがG区である。

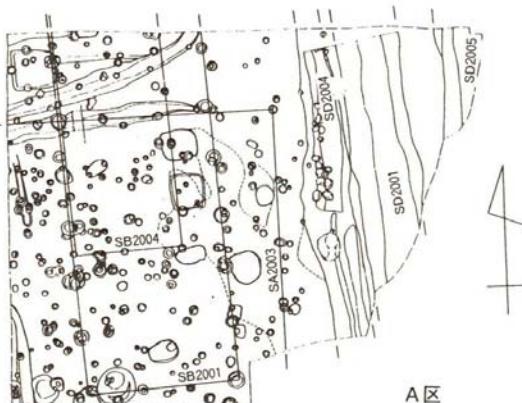
A区の調査

A区は、三重塔解体修理工事に伴う進入路部分に調査区が設定された。この地区は指定地の東辺の一角にあたるため、寺域の東部を区画する築地塀や溝などの施設が確認される可能性があった。

当調査区では中央部から南東部にかけて厚さ一〇メートル以下の整地層が分布していたが、検出された遺構の大部分はこの整地層上面から掘り込まれたものであった。A区で検出された主な遺構は、掘立柱建物跡・棟・柱穴列三条・溝七条などである（第37図参照）。

SB2001は、調査区西半に位置する南北棟の掘立柱建物跡である。梁間五・九トルを隔てて調査区外に延びる二条の柱穴列からなる。両柱穴列とも六間分を確認したが、その桁行の長さは一三・二メートルである。柱穴は平面形が円形ないし隅丸方形をなし、径六〇センチ前後で、柱抜き跡は径二五センチ前後である。遺構の時期は、中世の十四・十五世紀ごろと考えられる。

溝については調査区の東部で、南北方向に走る三条の大形溝が注目される。SD2001は、幅二・三メートルで、南側は道路によって削平されているが、北側は指定地内に更に伸びている。溝底から染付が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。SD2004は、SD2001の西側にあり、SD



第37図 豊前国分僧寺跡A区全体図 (1/300)

2001に一部削平されたながら平行して南北両方向の調査区外まで延びる溝である。幅一・一・一・〇メートルで、調査範囲内で長さ一一・五メートル分を確認した。中央よりやや南部の溝内には建物の礎石が一基転落しており、時期は十五世紀ごろと考えられる。

A区で検出された遺構は、大部分が中世から江戸時代のもので、創建時の奈良時代の明確な遺構は検出されなかつた。ただし、整地層中からは、八、九世紀の須恵器や、創建時に近い時期の鬼瓦（第38図）や鴻臚館系複弁七弁軒丸瓦・法隆寺系均等唐草文軒平瓦などが出土している。

B区の調査

B区は指定地の北西部で、A区同様寺域を区画する施設が残存する可能性がある地区である。当調査区は、中央部から南東部にかけての広い範囲で、近世以降に攪乱を受けており、それ以前の遺構は、西辺と北半にわずかに残存していた。主な遺構としては、建物跡一棟と溝二条がある。

SB2101は幅〇・三メートル・四

メートルの溝状遺構とその内部の石列と

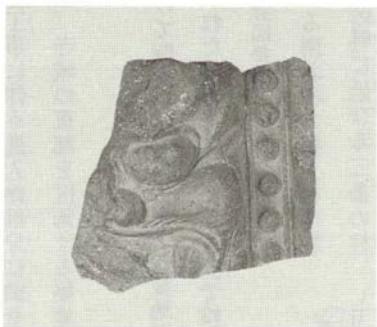
からなる。溝状遺構はこの建物の東

辺を構成し、南北方向に長さ四・八

メートルが確認され、内部からは鴻臚館

系軒丸瓦や法隆寺系軒平瓦（第39

図）などが出土している。遺物は奈



第38図 豊前国分僧寺A区出土鬼瓦



第39図 豊前国分僧寺B区出土
法隆寺系軒平瓦

良時代から平安時代初期にかけての

ものしかなく、SB2101は九世紀ごろの比較的古い建物の可能性がある。

SD2101は調査区の北辺を東西に走る溝である。遺構は幅二・四メートル、深さ一・五メートル前後で、調査区外の東方と西方に更に延び、A区のSD2001と一連の溝と考えられる。

C区の調査

C区は、三重塔の西側と南側に設定したトレーナーである。調査の目的は、奈良時代の創建時の塔が、本来どの位置にあったのかを探ることであった。

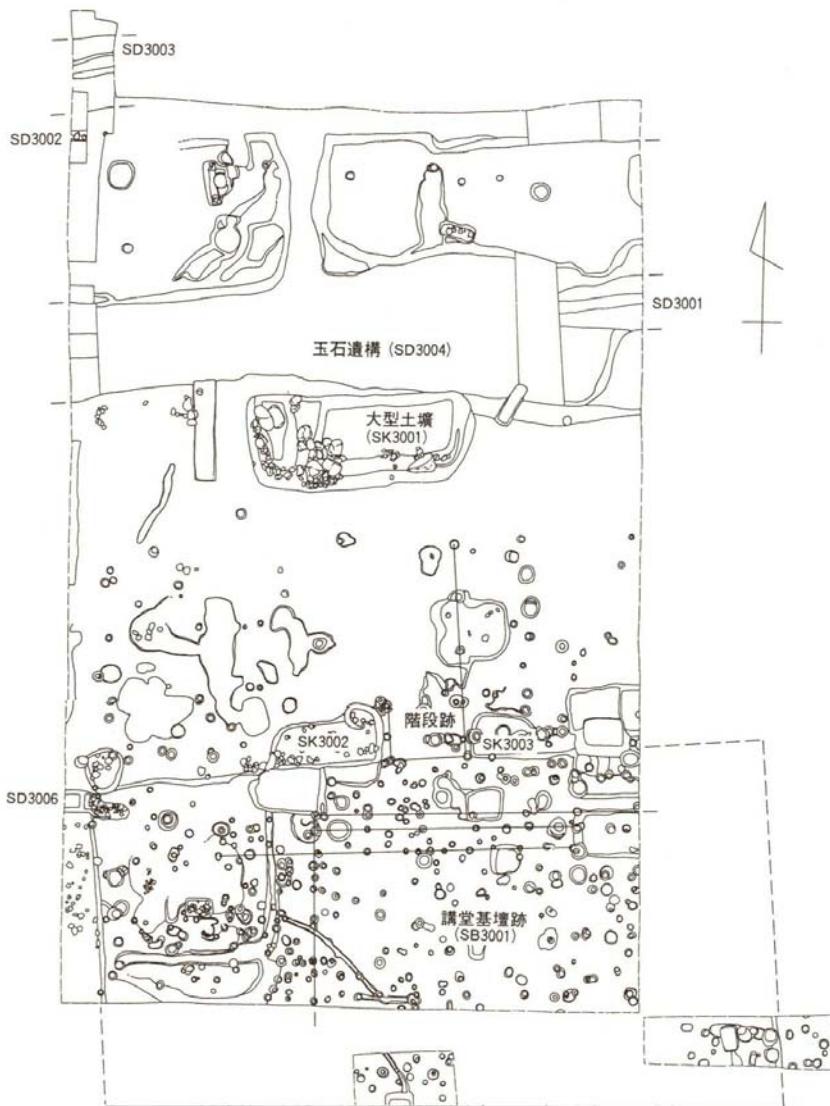
検出された遺構は、南側トレーナーのわずかなピットだけで、遺物も現在の三重塔に関係する明治期以降のものばかりであり、奈良・平安時代の遺物はまったく出土しなかった。

D区の調査

D区は、指定地北半のほぼ中央部に設定した最大の調査区である。この地区は現在の国分寺の中軸線上にあたり、創建時の七堂伽藍のうちの講堂以外にも僧坊や食堂などの主要建物が建立されていた可能性が非常に高い場所である。

当調査区は、指定地北部の平坦面から、その北側の低い段落ちにまたがる、東西幅約二三メートル・南北長さ三六メートルの長方形をなす調査区である。また、調査の進展に伴い、南東部と南西部に小調査区を追加した。確認された遺構の性格・分布状況は、北部・中央部・南部でそれぞれ異なっている。北部は東西方向に走る三条の溝と玉石を敷き詰めた遺構が主体をなし、中央部には大形土壙と整地層を切る不整形ピットなどからなり、南部は地山削りだしの土壙と多数の柱穴などからなる。検出された主な遺構は、基壇一基・掘立柱建物跡一基・柱穴列五条・溝（玉石遺構を含む）一〇条・土壙一二基などである（第40図参照）。ただし、このなかには弥生時代のものかと考えられる土壙三基が含まれている。

第3編 古代（奈良・平安時代）



第40図 豊前国分僧寺跡D区全体図（縮尺1/300）

SB3001は、調査区南部に位置する基壇跡である（第41図参照）。遺構は地山を削りだして土壇を造るもので、確認された部分では高さ〇・一～〇・三メートルである。建築当初はより高い段差を持つていたと考えられ、周辺の出土遺物から、基壇の外縁部には壇が積まれ、基壇上面には礎石が据えられ、屋根には瓦が葺かれていたと推定される。基壇の周辺部、特に東面と西面の段下からは小礎とともにこれらの遺物が多量に出土している。基壇の細部をみてみると、まず北面中央部に接して幅三・五メートル・長さ二・二メートルで、基壇外方に向かつて低くなる傾斜面がある。この遺構は恐らく建物外から基壇上にのぼる階段の名残と推定される。次に、この傾斜面の東西両側には基壇に接して二基の土壇（SK3002・SK3003）が検出された。二基ともに平面形が東西方向に長い隅丸方形をなし、規模はSK3002が長さ四・五メートル・幅一・九メートルで、SK3003は長さ四・一メートル・幅一・八メートルである。非常に浅い土壇であるが、内部からは小礎にまじつて瓦・土師器などが出土している。更に、基壇に付属する遺構としては、基壇上面北西隅から段下に落ち、西方向に調査区外へと延びる溝（SD3006）がある。この溝は基壇上面では長さ一・四メートル、段下で長さ一・〇メートルを確認し、幅〇・九メートルで、内部には径五～一五センチメートルの円礎が多量に詰まっていた。遺構の機能は、基壇上の建物に伴う排水溝と考えられる。SB3001は本調査区内で北辺と西辺の一部が確認され、南東部の調査区では南北方向に延びる同様の地山の削りだし（東辺）が検出されたが、南西部の小調査区では関連する遺構の南辺は確認されなかつた。これにより、SB3001は東西の長さが約二七メートルを計ることが判明したが、南北の幅については明確にできなかつた。遺構の主軸は、現在の国分寺の主軸に比べ、西側に約三度振つている。なお、国分寺の寺域内での位置や規模・構造の面から考えて、SB3001は講堂の基

壇跡と推定される。また、建立の時期には、関連遺構や周辺部からの出土遺物からみて、奈良時代の創建時の可能性が高い。

SK3001は、調査区中央部のやや北側に位置する大形土壙である（第42図参照）。遺構の平面形は、東西に長い隅丸長方形をなし、規模は東西長さ九・一メートル、南北幅三・八メートル、深さ一・〇メートルを計る。遺構内部の南側と西側の縁辺部には多量の礫が散乱していた。礫の大きさの面から、一二〇×四〇メートルのものと六〇×一一〇メートルのものとに大別される。大形の礫は一〇点前後あるが、花崗岩が多く、意識的に平坦面を作り出しているものもあり、建物の礎石として使用されていたものであろう。また、これらの礫とともに多量の瓦と数点の埠が出土している。埠は完形品がないが、一辺が三〇メートル程度の正方形をなすと推定され、厚さは七・七センチメートル前後のものである。表面に文様はなく、瓦にみられるような布目状の圧痕が残されている。こ



第41図 豊前国分僧寺D区講堂基壇跡 (SB3001)

の遺構の用途は、出土した遺物の性質からみて、国分寺の主要建物の建築材料を廃棄するためのものと考えられる。また、遺構内部に散乱する大形の礫は南側から転がして落としたような状況であることから、廃棄する対象となつた建物は、南側約一メートルの近距離にある講堂であろう。なお、SK3001の時期は、中世の十四・十五世紀ごろであろう。

SD3002は、調査区北端に走る東西の大形溝である。指定地内の位置や方位からみて、西方でB区のSD2101につながる東西溝で、A区の南北溝であるSD2001と一連のものと考えられる。

SD3001は、調査区の北側で、SD3002の南側五・五メートルを東西に走る溝である。遺構は幅一・四～三・九メートル、深さ一・〇メートルを計る。また、この溝の上部には玉石を敷き詰めた遺構であるSD3004が載つており、出土遺構からみて時期的には中世のものである。遺構の方位と時期の面から推定して、A区



第42図 豊前国分僧寺D区大形土壙 (SK3001)

の南北溝であるSD2004に連なる北辺の溝と考えられる。

SD3004は、調査区北側を東西に走る幅三・六～六・六メートルの玉石を敷いた遺構である。玉石の大きさは径一〇メートル以下のがほとんどで、遺構の性格は溝であるのか道であるのか不明である。時期は江戸時代である。なお、中央部から北方に延びる遺構からも同様の玉石が出土しており、一連の遺構と考えられる。

D区で確認された主な遺構を整理すると、まずSB3001は奈良時代の七堂伽藍を構成していた講堂の基壇跡である。中世の遺構としてはSK3001が建築材料を廃棄した大形土壙であり、SD3001が施設の北辺を区画する東西大溝である。江戸時代の遺構としては、SD3002がSD3001と同様の性格を持つ東西大溝、SD3004は国分寺寺域内を東西に走る道または溝である。

E区の調査

E区は、指定地の北東部に設定した調査区で、寺域の東辺や北辺を区画する溝や築地塀など の存在が予想された。当調査区の東側二メートルおよび北側一〇メートルより外側は高さ一メートル以上の段落ちとなつていて、当調査区も遺構の削平が著しく、検出された遺構はすべて中世以降のものである。主な遺構としては井戸一基・溝約一〇条などである。

SD3203は、調査区中央部のやや南側を東西に走る大形溝である。遺構は調査区外の東方と西方に延びるほか東部で南方に屈曲して枝分かれし調査区外へ続いている。溝の幅は一・八～三・四メートルで、A区のSD2001やD区のSD3002とつながる江戸時代の溝である。

SD3201は、調査区南端部で確認した東西溝で、調査区東部で南方へ屈曲している。溝の幅は一・一

トメーであり、A区のSD2004・D区のSD3001に連続する遺構である。

E区では多数の溝が確認されたが、SD3201を除くと大部分が江戸時代以降のものである。

F区の調査

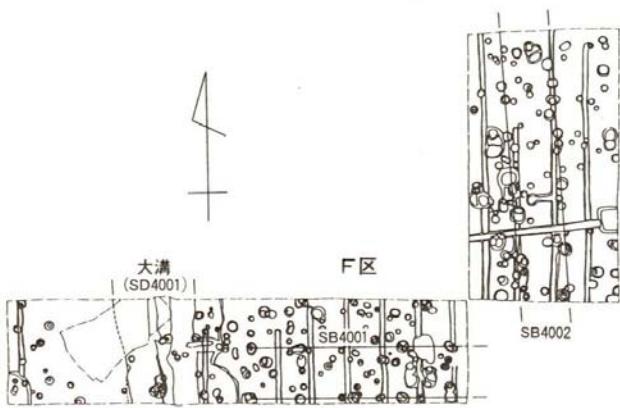
F区は、指定地の中央西部に設定した調査区で、現在の本堂の西側一四メートルにある。この地区周辺には金堂と講堂を結ぶ回廊が存在していた可能性があり、寺域の西辺を区画する施設が確認されることも予想された。

調査区は幅四・二メートル、長さ一八・二メートルの東西方向のトレンチと幅六・〇メートル、長さ一一・〇メートルの南北方向のトレンチからなる。検出された主な遺構は、掘立柱建物跡二棟・溝一四条と土壤などである（第43図）。

溝のうちSD4001は、東西トレンチの西側に位置する南

北方向の大形溝である。溝は幅二・六・三・一メートルで、深さ一・一メートルを計る。時期は中世に属し、A区のSD2004、D区のSD3001などに連なる一連の溝の東辺をなすものと考えられる。

掘立柱建物のうちSB4001は、東西トレンチの東半に位置する柱穴群で、二・〇メートルの距離をおいて二条の柱穴列が東西方向に並ぶ。検出された東西の長さは八・〇メートルで、柱穴は径五〇メセンチル、柱抜き跡は径



第43図 豊前国分僧寺F区全体図 (1/300)

一五〇～二〇メートルと小さい。この建物跡は東西方向に延びる回廊の一部かまたは東西両面に廂部を持つ南北棟の掘立柱建物跡と考えられる。遺構の時期は不明である。

SB4002は、南北トレンチで検出された南北方向の建物跡である。この建物跡も一一メートルの距離をおいて並ぶ二条の柱穴列からなり、調査区内で四間分（長さ八・三メートル）を検出したが、南北の調査区外に延びる可能性がある。柱穴は径四〇センチ前後である。

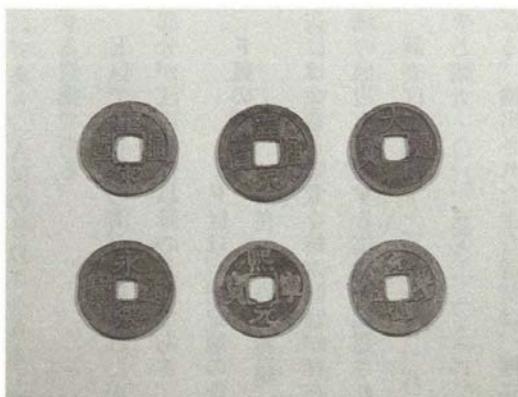
SK4001は、東西トレンチ東端にある、平面形が長さ九〇センチ、幅八〇センチの隅丸方形で、深さが八〇センチのピットである。内部の埋土中から中国の宋・明代の銅銭が計約八〇点出土した（第44図）。

F区ではSD4001の南北大溝の東側で柱穴が多数遺存するが、時期的には中世以降のものであろう。

G区の調査

G区は、D区の南に隣接する位置に設定した、幅四・〇メートル、長さ九・〇メートルの南北トレンチである。

D区の調査で確認できなかつた講堂基壇跡の南辺を検出するための調査区である。検出した主な遺構は掘立柱建物跡一棟・溝一条である。



第44図 豊前国分僧寺F区 SK 4001出土銅錢

SB4201は、東西方向に延びる二条の柱穴列で構成される東西棟の掘立柱建物跡である。梁間六・〇メートルで、柱穴は径四〇センチ

前後の円形である。方位はN—89—Wを指す。

G区では、当初の調査目的であつた講堂基壇跡の南辺は確認できなかつた。

発掘調査のまとめ

以上のように、豊前国分僧寺の発掘調査は四か年にわたり、史跡指定地内の北部を中心として約二四〇〇平方メートルの調査を行つた。その結果、確認された主な遺構は掘立柱を中心とする建物跡一三棟・柱穴列一〇条・井戸一基・土壙約三〇基・溝約三〇条などである。調査全体を通して判明した事実関係や推論・問題点などをまとめると以下のようになる。

(1) 各種遺構の残存状況をみると指定地北縁部・西縁部にはそれぞれ東西方向・南北方向の大形溝が走るが、その外側では概して柱穴などの遺構は少ない傾向がある。また、その内側についても後世の削平により、奈良時代の創建時から平安時代にかけての遺構は非常に少ない。ただし、中世以降の掘立柱建物跡や柵列はこれららの溝で区画された内側に広く分布していることが判明した。

(2) D区SB3001は東西の長さ約一七メートルを計る地山削りだしの基壇であるが、周辺の段下および北側の大形土壙の出土遺物から、創建時の奈良時代の建物跡と考えられる。また、博積み基壇の瓦葺き建物という内容と、寺域内での位置から推定して、講堂跡とすることが妥当である。この建物跡の構造として北面中央部に階段が設けられ、北西隅には排水溝も設置されていることが判明した。

(3) 創建時の中軸線について考える場合、唯一参考資料となるのが講堂基壇跡(SB3001)である。この建物が当時の中軸線上に乗っていたとするなら方位はN—約3°—Wとなる。これは現在の国分僧寺の方位に比べても約三度西に傾くことになり、講堂基壇跡北辺では四・〇メートル西にずれることになる。創建時の寺

域については、現在の地形から想像するしかない。指定地周辺の現地形は、現在の中軸線から東方約七〇メートル、西方約一二一〇メートルから外側は二、三メートルの段落ちがあることから最大限でも一町半程度と想像される。また、現在の山門の南数メートルの地点から花崗岩の礎石が一基出土しており、この位置を創建時の南門と推定すると、指定地北辺段落ちまでの南北の長さは約一八〇メートルとなる。この敷地内に建立された七堂伽藍のうち、D区の調査で講堂の位置が明確になった。金堂は現在の本堂の位置と重複するかやや南にあつたと推定されている。中門は現鐘楼門より南側、南門は現山門より数メートル南側の位置と考えられる。塔は従来、現三重塔の位置に創建時も建っていたと考えられていたが、周辺のC区の調査では創建時の遺構・遺物がまつたくなかつたことから、参道を挟んで逆の東側の位置について考慮に入れる必要がある。僧坊・食堂についてはまったく不明であるが、講堂の北部から西部にかけての地域に十分な空白地がある。

④中世の寺域については、A区・D区・F区で検出された南北方向・東西方向の溝(SD2004・SD3102・SD4001)を一連の区画施設として考えることができる。この場合、寺域の東西幅は溝の芯々で計測して約八四メートルとなる。その方位はN-約5°-Wである。

⑤江戸時代の主な遺構としては、A区・B区・D区・E区などで確認された一連の大形溝がある。この溝は北辺と東辺の一部を検出したが、それ以外の部分は指定地外に延びる。現在の国分僧寺を構成する主要な建物のうち本堂が宝永七年(一七一〇)、鐘楼門が貞享元年(一六八四)に建立されたといい、十七世紀後半代に急速に再建されていったことが分かる。これらの建物のうち本堂と北辺を区画する溝との間には約六〇メートルの敷地があり、記録に残るこれらの建物以外にも、指定地北部にはなんらかの施設が存在していた可能

性もある。その名残がD区北部に広がる玉石遺構（SD3004）なのかもしれない。

⑥出土遺物のうち瓦については、表採資料も含めてさまざまな形式のものが出土している。軒丸瓦では、百濟系単弁八弁・高句麗系・老司系単弁一九弁・鴻臚館系複弁七弁のほかにも単弁一三弁・単弁一六弁・単弁三七弁・複弁八弁などがある。軒平瓦では、重弧文・新羅系・老司系・法隆寺系などがあり、鬼瓦は大宰府系である。これらの瓦のうち、老司系と鴻臚館系の軒丸瓦及び老司系の軒平瓦は豊前国府跡出土のものと同范である。法隆寺系軒平瓦は築城町船迫堂帰り瓦窯跡で製作されている。博については先述したが、主要堂宇が堆積み基壇であったことを証明する資料となつた。日常雑器では、奈良・平安時代のものが非常に少ないが、中世では青磁・白磁をはじめ土師器や瓦質の火舎が出土しており、寺院として盛んに活動していたことを裏付けている。

(二) 豊前国分尼寺跡の発掘調査

豊前国分尼寺は、国分僧寺と谷を隔てて約二〇〇メートル東方の丘陵上に位置する。この丘陵は南方から北方に向かってしだいに高度を下げ、尼寺付近では標高四五メートル前後を計り、丘陵上部の平坦面は幅一〇〇メートル程度で、僧寺が立地する丘陵よりやや狭い。

この丘陵のやや南方の東側斜面には、平安時代初期に国分僧寺や尼寺の瓦を焼いた徳政瓦窯跡がある。また、この丘陵の西側斜面を中心とした周辺部の畠には須恵器・土師器や青磁・白磁などの土器片が散布している。

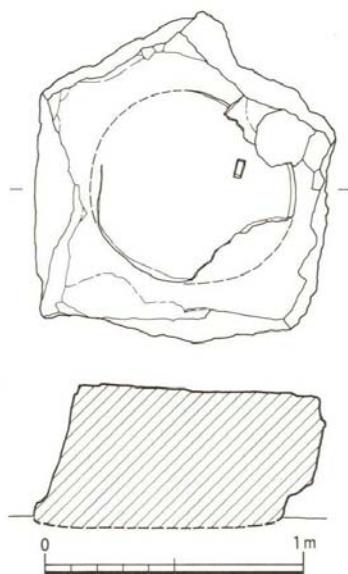
尼寺の歴史的変遷

尼寺は僧寺とともに、天平十三年（七四二）の国分寺建立の詔を受けて造営された豊前国の官寺であり、建立の時期は、僧寺が七五〇年代と考えられており、尼寺もほぼ

同じ奈良時代中ごろと推定される。尼寺は法華滅罪之寺と称され、寺院を構成する主要伽藍は、塔がないことを除き僧寺とほぼ同じであることが知られている。全国的にみて国分寺は、建立ののち平安時代の後半には衰退し、活動を停止するものが増えるが、豊前国分寺の場合中世の鎌倉・室町時代を通して法燈を絶やすことなく盛んに活動していたようである。天正年間（一五七三—一九二）の一五七〇年代に、戦国大名の大友氏と大内氏の争乱の際に、僧寺が攻撃目標となり、焼き討ちされたという伝承も国分寺が僧兵などの勢力を蓄えていたことを傍証していると考えられる。

建立後の尼寺の活動や存否については明らかではないが、中世までは僧寺と同じような経過をたどつたものと想像される。僧寺のほうは焼失後江戸時代に入つて慶安三年（一六五〇）に再び堂が造られ、寛文六年（一六六六）以降は小笠原藩の手によって再興された。尼寺は江戸時代には僧寺の子院となつており、『京都郡誌』によるとその堂宇は「文政十一戊子年為暴風顛倒以來解体」とあり、十九世紀前半に倒壊し、その後無住となつたことがうかがわれる。更に同書には「仲津郡国分村国分寺本堂より三町許東方に、尼寺趾ありて、今僅に二間四方地蔵堂のみあり、堂の四方、往々に昔の礎残れり、境内凡て二町四方許なるが、今まで、其内を耕す事を禁むれば、荒原となれり」とあり、明治末から大正初期には二間四方の地蔵堂が建ち、周辺に礎石が残つていただことがうかがわれる。

現在尼寺推定地付近は、尾根線上を南北に町道が走り、点々と宅地になりつつある。このため、豊津町は



第45図 豊前国分尼寺跡礎石実測図

尼ヶ堂と呼ばれる寺域内的一角を公有化し、保存を図っている。先の町道の工事の際に発見された礎石（第45図）が、この公有地に置かれているが、他の礎石は若宮八幡神社の鳥居の礎石などに移されて残っている。

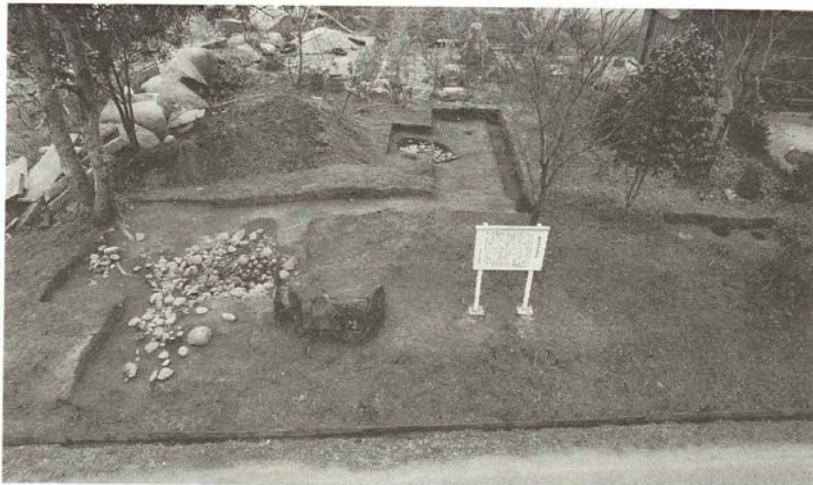
発掘調査の内容

尼寺跡の発掘調査は、大字徳政の先の

公有地で一九九二年に実施した（第46

図参照）。公有地自体の面積が狭いことから、調査は小範囲のトレンチ調査となつた。

調査によつて検出された遺構は、五〇三〇メートル程度の



第46図 豊前国分尼寺跡発掘調査全景

礫と瓦や土器片を多量に内包する径約一・五メートル落ち込みと、そこから北・東・南方向に延びる幅一メートルの溝状遺構がある。ただし、これらの遺構の時期は出土遺物からみて江戸時代まで下るものと考えられる。また、礎石の据え跡の可能性がある、底部に礎を持つ径一・五メートル程度の土壙も一基確認された。この遺構の時期は不明である。

尼寺関係の遺物としては、従来から老司系扁行唐草文軒平瓦の存在が知られていたが、今回の調査で新たに平安時代の細弁三七弁軒丸瓦が出土した。

(三) 豊前国分寺の関連遺跡

(1) 正道遺跡

正道遺跡は豊前国分僧寺が所在する丘陵から小谷を隔てた西方の丘陵上にある。この丘陵は南方から北方へとしだいに高さを減じており、発掘調査地付近では標高約四七メートル前後になつてている。また、この丘陵は、国分寺が立地する丘陵に比べやや狭く、上部の平坦面の幅が約一五〇メートルである。

豊前国分寺に関する遺跡は、僧寺が所在する丘陵を中心として、東方約一五〇メートルにある尼寺や、更にその南東約一五〇メートルの徳政瓦窯跡などが知られていた（第47図参照）。しかし、僧寺の西方の丘陵は良好な平坦面が広がるにもかかわらず、国分墓地に江戸時代以降の国分寺の歴代住僧の墓碑が二〇基程度ある以外に、具体的な遺跡は確認されていなかつた。

第3章 律令政治の展開と郷土—奈良・平安時代



1. 豊前国分僧寺跡 2. 豊前国分尼寺跡 3. 北原遺跡 4. 正道遺跡
5. 大敷の礎石 6. 寺屋敷遺跡 7. 徳政瓦窯跡 8. 伽藍橋 9. 官道

第47図 豊前国分寺関連遺跡分布図

調査経過と 遺跡の概要

国分地区では、昭和六十三年度に農村基盤総合整備パイロット事業による農地の区画整理が行われることとなつた。そのため、事業予定地内の削平部分について、遺跡のトレンチ調査を実施した。その結果、柱穴や溝などが検出された字正道地区に発掘調査区を設定することとなつた。

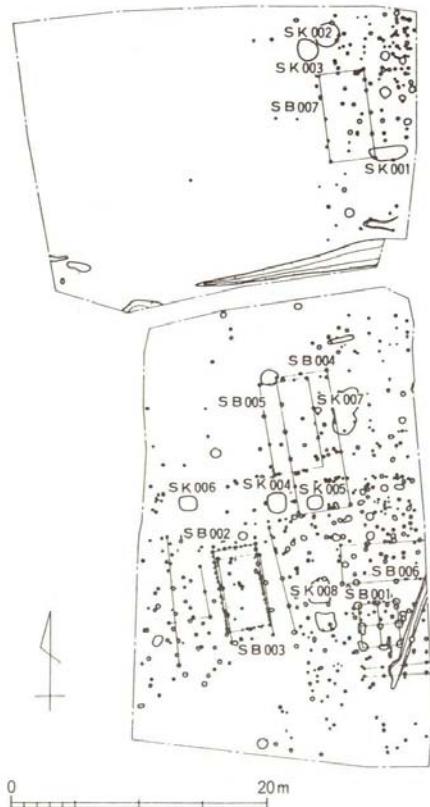
正道遺跡は、僧寺からは約二五〇メートルの距離があり、両者の間に南北に延びる小谷からは約五メートルの比高差がある。調査区はこの丘陵上平坦面の東縁部沿いで、国分墓地の南側に接する位置に設定された。調査区は畦畔を境にして、便宜的に北側を北区、南側を南区とした。調査面積は北区が六四四平方メートル、南区が七六八平方メートルで、合計一四一二平方メートルである。

検出した遺構は、掘立柱建物跡七棟・土壙一〇基・溝二条のほかに、柱穴列と多数のピットがある(第48図参照)。出土遺物は少ないが、時期的には八世紀代以降のもので、十一世紀から十三世紀にかけてのものが多い。

検出された 遺構・遺物

遺跡の詳細
の詳細は、以下に述べる。

掘立柱建物跡のうちSB



第48図 正道遺跡全体図

001は南区の南東部に位置する方二間の総柱建物で、規模は東西柱穴間が一五〇メートル等間隔の三・〇メートル、南北間は一七一メートル等間隔の約三・四二メートルである。

柱掘方は基本的に隅丸方形をなし、五〇～七〇メートルの大きさである。埋土は黄褐色を呈し、比較的古い時期の建物跡と考えられる。SB002（第49図参照）は

南区のほぼ中央部に位置する桁行四間（六・五一メートル）、梁間二間（三・三〇メートル）の南北棟建物で、各主柱穴間に更に三本前後の小柱穴を設ける。柱穴の埋土は暗灰色を呈し、やや新しい時期の建物跡と推定される。

これら掘立柱建物跡の建築方向は、SB006を除くとすべて南北棟建物で、方位も磁北から西に一〇度前後で一致している。

土壤は北区・南区で合計一〇基検出されたが、平面

形態が長方形に近いものが多く、土壤墓と断定できるものはない。SK008は南区の中央よりやや南側に位置する。平面形は南北約一・〇メートル、東西約一・七



第49図 正道遺跡 SB 002発掘状況



第50図 正道遺跡 SK 008出土
土佛

トルの方形をなす。遺物は土師器の碗・皿、瓦器碗・白磁碗などと、埴仏(第50図)が一点出土した。この埴仏は長さ六・七センチ、幅五・〇センチ、厚さ一・一センチで、文様は大分県宇佐市虚空藏寺塔跡出土のものと同形式で「右手施無畏、左手を膝におく如来像が宣字座に腰掛け、左右には後脚で立つ二匹の獅子を表している。両足は厚味のある蓮華に置く。左右に向き合う獅子を配した台座は、下部の蓮華に支えられたように宣字座を支える台座となつている。」(賀川光夫「宇佐虚空藏寺塔址発見の埴仏」太宰府古文化論叢、一九八三)。当埴仏は図案の対称性からみて、左辺が一、二メートル程度削られている可能性がある。

遺跡の性格

先述したとおり、豊前国分僧寺跡の半径約五〇〇メートルの範囲には、尼寺跡や後述する徳政瓦窯跡・北原遺跡やこの正道遺跡など、奈良時代から平安時代にかけて国分寺に関連していたと考えられる遺跡が集中する。正道遺跡の掘立柱建物跡は柱穴内からの遺物が少なく時期の判定は困難であるが、埋土の状況からみてSB001がやや古い様相を呈するが、ほかは平安時代を中心にして建設されたものと推定される。また、検出された土壤群の性格は不明であるが、SK008から出土した埴仏は貴重な資料である。一般的に埴仏は仏教関係施設の室内壁面の装飾に用いられるものであるが、当遺跡では一点のみの出土であり、また同形式の宇佐市虚空藏寺のものが白鳳期に属していたのに対し、当埴仏が出土したSK

008は共伴遺物からみて十二世紀に属する。このようなことから、当博仮は他の仏教施設に使用されたものを転用し、図案の如来像を重視して持仮などとして使用したものと推測される。

このように考えると、わずか一点の博仮の出土はあるが、正道遺跡には国分寺建立から約四〇〇年経過した平安時代末においても、なお仏教にかかる人間の生活の跡が残されていたと想像することができる。

(2) 北原遺跡

北原遺跡は豊前国分僧寺と同じ丘陵の北北西約四〇〇メートルに位置する。この丘陵は北方に向かつてしまいに低くなり、当遺跡付近では標高四二一メートル前後である。遺跡の所在地は豊津町大字国分字北原である。

当遺跡の範囲は、丘陵上の平坦面に限られており、西側は比高差約七〇一〇メートルの谷が南方に延び、豊前国分僧寺と正道遺跡を隔てる小谷に続いている。また、北東約二五〇メートルには、北西—南東方向に古代の官道が走つており、豊前国府政庁推定地とは直線距離で約六〇〇メートルである。

調査経過と 大字国分字北原一帯は、近年まで畠地に利用されていたが、昭和五十年代前半以降、北側の遺跡の概要

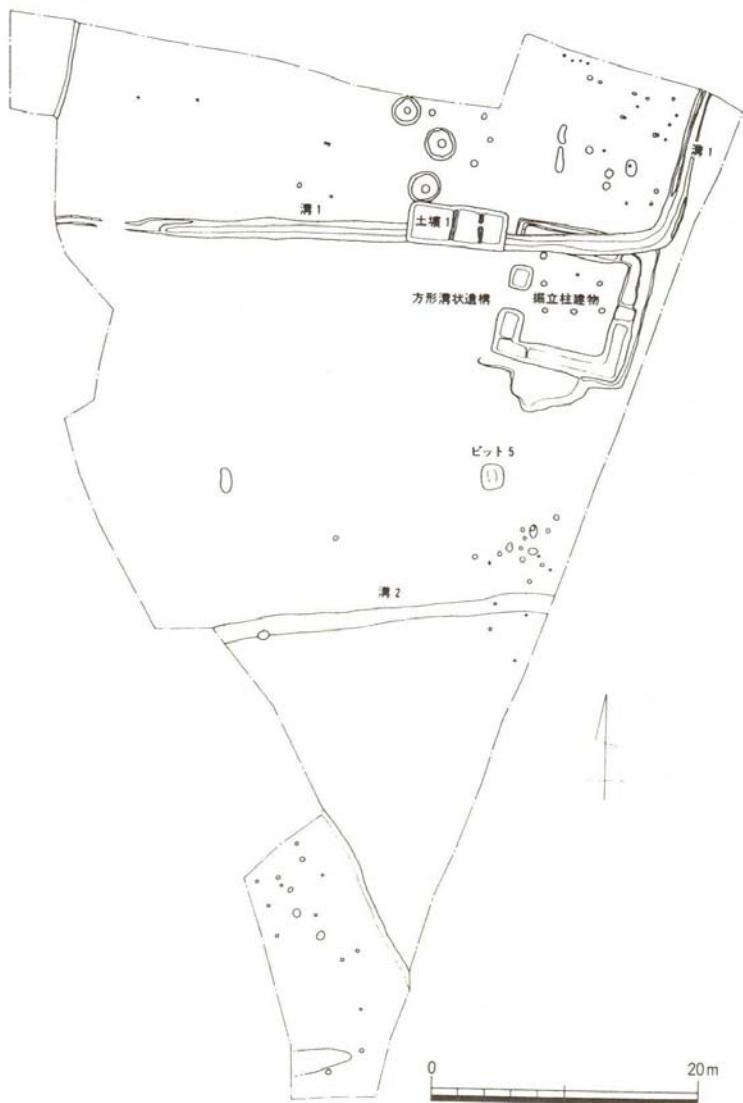
字城塚にB&G豊津海洋センターが建設され、駐車場・ゲートボール場などが設置された。

この前後から字北原の南部は廃棄物の捨て場となり、雑木が繁茂する原野になつて行った。豊津町は昭和六十一年に、この北原西側の谷部に四〇〇メートルトラックを有する運動公園の建設を開始し、字北原南部がス tandem部分にあたり一部削平されることとなつた。このため、埋蔵文化財の試掘調査を実施したところ、溝状の遺構やピットが検出され、須恵器・土師器とともに龍泉窯系青磁碗が出土した。

本調査区はこの一帯の丘陵上の平坦面に設定され、二二八〇平方メートルの面積を対象とした。

第3編 古代（奈良・平安時代）

棟・方形溝状遺構一基・溝二条・土壙一基などであるが、時期的には弥生時代から近世までの長期間にわたる遺跡は全体的に削平が著しく、遺構は調査区北東部に集中していた。検出した主な遺構は掘立柱建物跡一

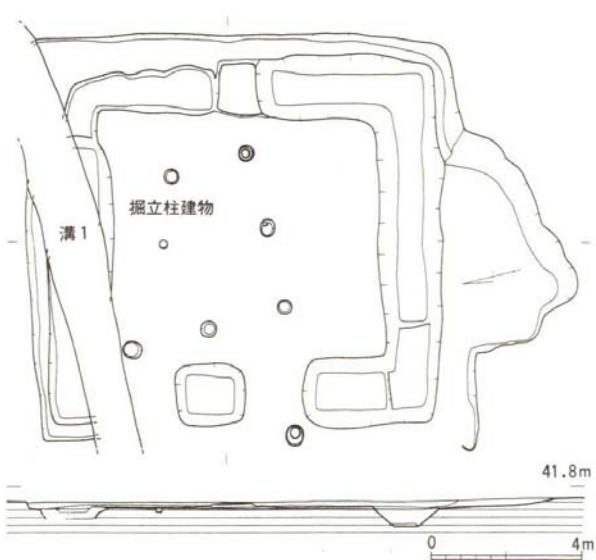


第51図 北原遺跡全体図

るものであった（第51図参照）。

遺跡の詳細

検出した各種遺構のうち、掘立柱建物跡（第52図・第53図参照）は調査区北東部に位置し、方形溝状遺構および溝一によって一部切られている。建物の平面形態は方二間で、規模は東西



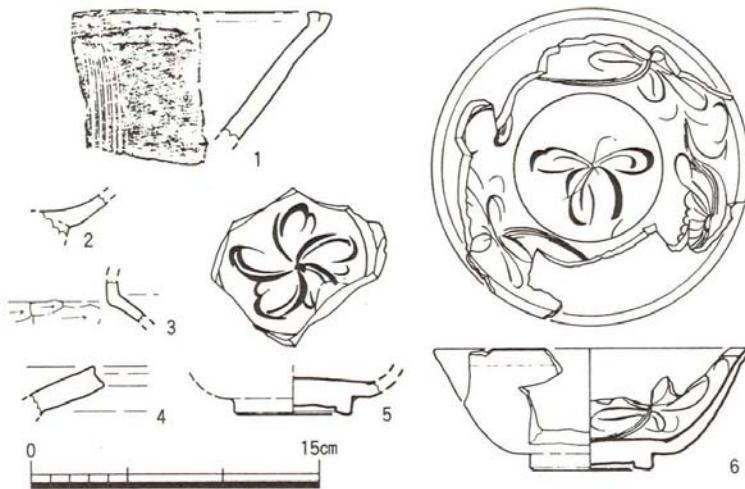
第52図 掘立柱建物跡・方形溝状遺構実測図



第53図 掘立柱建物跡・方形溝状遺構検出状況

幅四・一六メートル、南北長四・二九メートルである。柱掘方はすべて径四〇メートル前後のほぼ円形をなし、柱抜き跡は径二〇メートル前後である。方位は約一度ほど西に振つてゐる。この建物の時期は、出土した須恵器の蓋の形式からみて八世紀後半代と考えられる。

方形溝状遺構（第52図・第53図参照）は掘立柱建物跡を切り、溝一に切られている。溝は東西約一〇・五メートル、南北約一一・〇メートルの規模で、ほぼ正方形にめぐらされている。溝で囲まれた内面は、東西約六・五メートル、南北約七・六メートルの広さを持ち、東辺中央部には幅約一・〇メートルの陸橋状の平坦面があり、西辺中央部には幅約一・六メートル、長さ約一・八メートル、深さ〇・四五メートルの方形ピットを有する。溝の幅は約一・九メートル、深さは北辺部で一部浅くなつてゐるが、全体としては〇・五メートルである。遺物（第54図）は、須恵器片（4）・土師器片（2・3）・瓦質土器の擂鉢（1）のほかに龍泉窯系の青磁碗I-2（横田賢次郎・森



第54図 北原遺跡方形溝状遺構出土遺物実測図

田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4、一九七八）に属するものが二点（5・6）出土している。遺構の時期は十三世紀後半から十四世紀前半の鎌倉時代後半期であろう。

溝一は調査区北部を東西に走り、調査区東端部で北方へ屈曲する。検出した総延長は約五七メートルに達し、幅は約〇・七一・五メートル、深さは最も深い部分で〇・五七メートルである。溝内埋土からは須恵器片や土師器の杯・皿、瓦器碗、施釉陶器片、龍泉窯系・同安窯系の青磁碗、白磁の皿・合子などが出土している。遺構の時期は、十四世紀後半ないし十五世紀の室町時代前半期に属すると考えられる。

遺跡の性格

豊前国分寺は、奈良時代後半の創建以来、天正年間の大友氏の焼き討ちまで、八百余年にわたり法燈を絶やさなかつた。北原遺跡の掘立柱建物跡は、まさに創建直後の時期にあたつている。また、方形溝状遺構は鎌倉時代後半期、溝一は室町時代前半期の施設であり、遺構内からは白磁の合子や龍泉窯系・同安窯系の青磁など輸入陶磁器が出土している。このような特殊な遺物は、官衙または寺院との関連が考えられるが、鎌倉時代後半期になると大字国作・惣社の豊前国府域内には、生活の跡がほとんどなくなる。このため、これらの施設を使用していたのは、直接的に豊前国分寺に關係していた人々と想像することができる。

更に、当遺跡と豊前国分僧寺が直線距離で約四〇〇メートルを隔てていることは、中世においてもなお国分寺が、かなり広い範囲の直接的な生活領域を有していたことを示している。

(3) 德政瓦窯跡

豊前国分寺の尼寺が所在する徳政地区の丘陵は南方から北方へとしだいに高さを減じながら延びるが、徳

政瓦窯跡は尼寺の南東一〇〇メートルに隣接する丘陵東側の斜面に立地する。

現在窯跡の一部は、徳政の若宮八幡神社の北西隅に残存している（第55図）。

遺跡の内容 当窯跡は現状の地形からみて、窯本体の下位

から焚口部分が道路によつて破壊されている

ものと推定されるが、窯跡の上位や全面の灰原は道路を挟んで両側に遺存していると考えられる。遺跡の概要をさぐる調査は、昭和十二年に森貞次郎氏によつて行われており、その際次のように報告されている。「若宮八幡の社殿背後の西向斜面を、南北に横切る幅員一間の道路がある。瓦窯は胴部を此の道路によつて横断されている。窯は登り窯で、道の西側の排水溝付近が焚口と推定される。窯壁は脆い壁土で赤褐色に焼き締まっている。内部は褐黒色の土が充满し、多数の布目のある宇瓦の小破片が少量の木炭屑と共に道路上の断面及び東側掘崩崖の断面に露出している。」

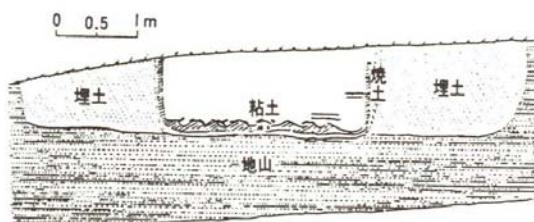
この後、道路の拡張工事の際に再び窯跡が削られ、その際に故原口信行氏らによつて調査され、実測図が残されている（第56図）。



第55図 德政瓦窯跡

当地域には七世紀末の白鳳期に上坂廃寺が建立され、奈良時代に入ると豊前国府も建設されており、両遺跡からは発掘調査によつて各時代の大量の瓦が出土している。このため、瓦を焼いた窯跡はこれら以外にも豊津町内を中心とした周辺地域に多数分布しているものと推測され、今後丘陵部の斜面などでは関連遺構の存在に注意が必要であろう。

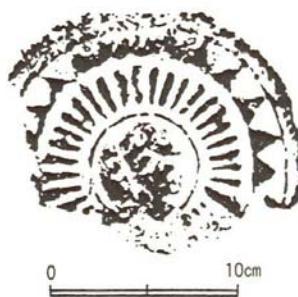
知られている。



第56図 德政瓦窯跡断面図 (『豊津町誌』より)

遺跡の性格 当窯跡から出土したとされる瓦のうち、型式が判明している軒瓦には細弁三七弁軒丸瓦がある(第57図)。この軒瓦と同范と考えられるものが、かつて豊前国分寺に一点所蔵されていたといわれている。この瓦は文様の型式からみて十世紀以降の平安時代に下る時期のものである。このことから、豊前国分寺が奈良時代中期に建立されたのち、平安時代に入つて増改築や修理を行つた際に当窯跡が作られ、その製品が供給されたものと推定される。

なお、奈良時代の国分寺の瓦を焼いた窯跡は、築城町の船迫堂帰り瓦窯跡がよく知られている。



第57図 德政瓦窯跡出土
軒丸瓦実測図

(九州歴史資料館編『九州古瓦図録』より)